

■ 9月16日

国交省、羽田空港、国際線深夜着陸料、引き下げを検討

国交省は2014年度から羽田空港の深夜帯国際線着陸料を引き下げる検討に入った。新たな路線を就航させたり増便したりする場合、航空会社が負担する着陸料を3年間にわたり年20～50%引き下げる。値下げを呼び水に国際路線を誘致したい考えだ。

日経によると、国交省は着陸料の軽減措置導入に向け、財務省との調整に入った。対象は来年度から深夜・早朝時間帯(午後11時～午前5時台)に新規就航が増便した路線。割引率は1年目が50%、2年目は30%、3年目が20%と段階的に縮小する。国交省は路線誘致の効果を見極めながら15年度以降に就航・増便した場合も3年間の割引を求める構えだ。

羽田発着の国際線の着陸料は現在、時間帯を問わず一定で、米ボーイング社の大型機「777」の場合は1機あたり約70万円。割引を適用すると1年目に35万円、2年目に49万円、3年目に56万円になる。航空会社が深夜に1便増やすと単純計算で3年間分の割引額は約2.5億円にのぼる。

国交省は10年に羽田空港の国際線定期便を32年ぶりに本格解禁し、昼間と深夜帯で国際線発着枠を年3万回ずつ割り振った。ただ羽田を深夜帯に離着陸する国際線は1日30便で、深夜に利用可能な発着枠(約80便)の半分以下となっている。

(日経)9/16

<http://www.nikkei.com/article/DGXNZO59774730W3A910C1MM8000/?df=2&dg=1> (->

<http://www.nikkei.com/article/DGXNZO59774730W3A910C1MM8000/?df=2&dg=1>)

成田空港、ノンストップゲート化、2015年3月までに導入

成田国際空港会社(NAA)と県警などが成田空港の入港時検問を機械警備などに切り替える「ノンストップゲート化」について2015年3月までに導入を図ることで合意したことが13日、分かった。これに伴い、千葉県は空港周辺の警備体制を強化するための予算約4億円を来年度当初予算案に計上する。利便性向上のために旅客車両などが入る際の検問をなくす一方で、パトカーの追加配備や新たな資機材も導入する。千葉日報が報じた。

成田空港は15年3月に年間発着枠30万回化と格安航空会社(LCC)専用ターミナル開業を控えており、旅客増加が見込まれる。その為、NAAは旅客らの利便性向上に向け、顔を識別する監視カメラ装置を導入し、入港時の警備員による身分証確認をなくすノンストップゲート化(機械化)の準備を進めている。

(千葉日報)9/14

<http://www.chibanippo.co.jp/c/news/politics/156236> (-> <http://www.chibanippo.co.jp/c/news/politics/156236>)

航空各社、8月、沖縄路線搭乗実績、旅客数、前年同月比14.3%増

沖縄路線に就航する航空6社は12日までに、8月の搭乗実績をまとめた。全体の旅客者数は前年同月比14.3%増の166万8007人、提供座席数は11.6%増の210万2031席だった。離島路線が好調だったことや、台風の影響が少なかったことが主な要因だった。沖縄タイムスが報じた。

航空各社の概要は以下の通り:

- ・全日空は石垣路線と宮古路線が好調でいずれも前年の搭乗率を上回った。提供座席数は94万2510席だった。
- ・日航は那覇-伊丹線を1往復増便したことで旅客者数、提供座席数ともに増加した。提供座席数は42万5506席。
- ・JTA(日本トランスオーシャン航空)は増便した岡山線や離島線を中心に全体的に高い搭乗率だった。提供座席数は34万8010席。
- ・RAC(琉球エア-コミュニーター)は与論線、石垣線が好調だった。提供座席数は5万1175席だった。
- ・スカイマークは新設した石垣線が全体数を引き上げた。提供座席数は27万102席だった。
- ・ソラシドエアは神戸線の新規就航と台風の影響による欠航がなかったことが増加要因となった。提供座席数は6万4728席。

(沖縄タイムス)9/14

http://article.okinawatimes.co.jp/article/2013-09-14_54077 (-> http://article.okinawatimes.co.jp/article/2013-09-14_54077)

中華航空、富山—台北線、4-8月利用率72.3%

中華航空による富山—台北便の利用者数が4～8月、昨年同期からほぼ倍増していたことが富山県のまとめで分かった。県は、便数が昨年度の週2～3便から4便に増えたことや、立山黒部アルペンルートを訪ねる台湾人観光客が急増したことが後押ししたとみている。読売新聞が報じた。

台北便は昨年4月に週2便態勢で就航し、夏場は3便態勢で運航され、好調な利用が見込めることから、今年4月、アルペンルートの開通に合わせて週4便に増便した。

県総合交通政策室によると、4～8月の利用者数は昨年同期の9727人から今年は1万8951人に倍増、利用率は72.3%だった。

(読売新聞)9/15

<http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/toyama/news/20130914-OYT8T01228.htm> (-> <http://www.yomiuri.co.jp/e-japan/toyama/news/20130914-OYT8T01228.htm>)

スクート(LCC)、香港—シンガポール線開設を計画

シンガポール航空傘下の格安航空会社(LCC)、スクートが香港～シンガポール線を開設し香港市場に参入する意向のようだ。具体的な計画は明らかになっていないが、今週中にも進出計画を発表する見通しだという。14日付大公報が伝えた。

スクートは2011年の設立。現在はシンガポールとバンコク、台北、東京、ソウル、天津、青島、瀋陽、南京、ゴールドコーストなどを結ぶ便を主要路線としている。

香港では、HKエクスプレスが10月末からLCCとして再出発することが決まっているほか、ジェットスター香港が運航開始に向けて現在、当局の審査を受けている。また日本のピーチ・アビエーションやタイガー・エアウェイズなどといったLCCも香港路線を設けており、LCCの参入が続いている。

(NNA ASIA)9/16

<http://news.nna.jp/free/news/20130916hkd002A.html> (-> <http://news.nna.jp/free/news/20130916hkd002A.html>)

大韓航空、運賃以外の副収入、売上高全体の6.5%

(yonhapnewsによると)

大韓航空は昨年、旅客・貨物運賃以外の機内免税品販売や航空券払い戻し手数料などによる副収入が売上高全体(110億3751万ドル＝約1兆965億円)の6.5%に当たる7億2090万ドルに達した。副収入額はエアフランスなどととも世界10位となった。米航空コンサルタント会社、アイデアワークスが15日までに明らかにした。

大韓航空の副収入は乗客1人当たりに換算すると30.04ドルと集計された。

同社は今年初めて副収入を公開した。ただ、内訳は明らかにしていない。関係者によると仁川国際空港での海外の航空機に対する給油・整備サービスや、系列会社への航空機貸し出し、旅行会社への予約システム提供など多様な事業で上げた収入も副収入に分類したと説明した。

アイデアワークスによると副収入額を公開した世界の航空会社53社の昨年の副収入は計271億ドルと集計された。2011年より20%増え、2009年に比べ倍増した。各社は手荷物料金、飲食物販売、優先搭乗制、無線インターネットサービスなどで様々な収益を上げている。

アイデアワークスは格安航空会社(LCC)だけでなく最近では多くの航空会社が新たな収入源を探しており、今後も運賃以外の収益が伸び続けるだろうと予測した。

副収入が最も多かったのは米ユナイテッド航空(53億5200万ドル)で2位以下はデルタ、アメリカン、サウスウエストと米航空会社が続いた。

(yonhapnews)9/15

<http://japanese.yonhapnews.co.kr/economy/2013/09/15/0500000000AJP20130915000700882.HTML> (-> <http://japanese.yonhapnews.co.kr/economy/2013/09/15/0500000000AJP20130915000700882.HTML>)